

J. S. ミルの福祉思想に関する一考察

—フェビアン社会主義への影響—

金子 光 一

問題の所在

本研究は、ヴィクトリア女王 (Queen Victoria) 治世時代 (1837-1901年) のイギリスを代表する哲学者・経済学者であるジョン・スチュアート・ミル (John Stuart Mill, 以下, ミルと略す) が, フェビアン社会主義 (Fabian Socialism) に与えた影響を, 社会福祉学の視点から歴史的に検証したものである。周知の通り, ミルに関する先行研究は膨大な数に上り, 日本においても明治初年以來, 哲学, 倫理学, 経済学等の学問分野で数多くの研究書が出版されている。したがって, 本研究においては, あくまでもミルの思想の根底に如何なる福祉思想があるか, また, そのミルの思想が初期のフェビアン協会のメンバーに如何なる影響を与え, 福祉国家の形成等に貢献をしたかについて明らかにすることに限定したい。

ミルとフェビアン社会主義の関係を明らかにする試みは, 近年イギリスにおいても盛んであり, 4年前の1998年には, デイヴィット・ヒューム (David Hume), ジェレミイ・ベンサム (Jeremy Bentham) の系譜に, ミルとビアトリス・ウェップ (Beatrice Webb) を取り上げて論じた『確実性の追求』 (*The Pursuit of Certainty: David Hume, Jeremy Bentham, John Stuart Mill, Beatrice Webb*) がLiberty Fundから公にされている。著者のシャーリー・ロビン・レトウィン (Shirley Robin Letwin) は, 序文において「社会福祉のために政府はどのくらいのことをなすべきかという議論は, 福祉を如何に構成するかという意見の論争と関連していると考えられ, 近年の社会福祉政策の最も大きい変化は, もはや政府の役割に対する諸説ではなく, 活動の適切なやり方の概念へと移行している」 (Letwin 1998: iv, x) と指摘している。またレトウィンはこの後続けて, 「イギリスにおいて政策の概念がどのように変化してきたかは, デイビット・ヒューム, ジェレミイ・ベンサム, J.M.ミル, ビアトリス・ウェップの生涯と仕事を通じた足跡を探ることで明らかになる」 (Letwin 1998: x) としている。レトウィンのこの主張は, ヘンリー・パリス (Henry Parris) の「世紀の初めベンサムにはじまり, 終わりにはフェビアン社会主義へと続いた思想の流れ」 (R.A. Lewis, 1952: 188)

からの影響が大きいと考えられるが、これまでピアトリス・ウェップを研究対象として福祉思想の考察を行ってきた筆者は、本書を契機としてミルからの思想の系譜を解明する必要性を感じた。

筆者が用いる「福祉思想」とは、「広く今日の社会福祉学の発展の基礎となる見解を意味し、それは社会・経済思想、社会主義思想、実践的社会事業思想、宗教思想等の思潮の変化の中で形成され、それらが時代の要請により体系づけられ具現化されたものをさしている。」(金子1997:21) その意味から、本稿ではミルの思想の中でも特に社会福祉学の発展の基礎となる見解に焦点を当てて論じたい。

第1章 ミルの福祉思想

第1節 ミルの貧富の格差に対する見解 — 『経済学原理』を通じて—

フェビアン協会のジュリアス・ウエスト (Julius West) が、1913年に『フェビアン・トラクト』(*Fabian Tract*)の168号で、「1848年に公にされた『経済学原理』(*Principles of Political Economy*) は、人類の思想に対するミルの最も重要な貢献である」(West 1913:5) と述べているように、同書は、生産論、分配論、交換論という所謂静態の経済学以外に、社会の進歩が生産及び分配に及ぼす影響を社会動態論の視点から分析しており、その内容は経済学のみならず学際的諸分野から高く評価されている。そこでまず初めに、この『経済学原理』を通じて、ミルの貧富の格差に対する見解を解明したい。

ミル自身は、この『経済学原理』を次のように捉えていた。「我々は、すべての現行制度や社会機構を、…「単に暫定的な」(merely provisional) ものとして、(例えば協同消費組合のような) 選ばれた人々によるすべての社会主義的実験を、最大の喜びと興味をもって歓迎した。…これらの意見は私の『経済学原理』で説かれている。初版ではそれほど明瞭であったとはいえないが、2版ではやや詳しくなり、3版ではまず曖昧なところがないまでになっている。…初版では社会主義の難点が強く述べられて、そのため全体の調子は反社会主義的でさえあった。ところがその後の12年のあいだに私は、大陸の一流の社会主義的思想家たちが行った研究と、それらの論争に顔を出す広い領域に渡る諸問題についての思索と討論とに、多くの時間を費やした結果、この問題について初版で述べてあったことの大部分がけずられて、もっと進んだ意見を表明する議論や反省がそれにとって代ったのであった。」(Mill 1873:177)

『経済学原理』は、第1版において社会主義に共感しないわけではないが、実現不可能という主張であった。その時のミルは、無条件な自由放任ではなく、消費者の教育、労働時間の制限、救貧活動、移民事業等に国家事業または国家干渉を認めているが、国家の勢力が増

大することは自由への脅威と考え、むしろ道徳的根拠からその増大に反対していた。ところが1848年の革命以後に出された第2版、特に第3版以後のものでは、社会主義への研究を深めて、それに対して積極的に支持する立場になっている¹。

ミルは、経済法則は自然の必然性だけによって決まるのではなく、それと現存の社会機構との組み合わせによって決定するのだから、当然それは一時的なもの、社会改良の進捗によって大いに变化を受けるべきものと主張している。すなわち、ミルはこの『経済学原理』において、社会主義に対して理解を示し、現在の社会状況の矛盾に対して警告していると考えられる。同書の第2篇第1章第3節「共産主義の吟味」には次のような記述がある。

「もしその長所のすべてを伴った共産主義と、そのすべての苦痛と不正とを備えた現在の社会状態とでどちらが可とすべきかということであれば、また私有財産の制度は、その結果として、労働の生産物が、今私たちが目撃しているような様式においてほとんど労働に反比例して割当てられる、すなわち最も多くの部分が、まったく労働をしなかった人たちに与えられ、ほとんど名ばかりの仕事しかしなかった人たちにこれについて多くの部分が与えられ、このように漸次減少し、仕事が苛烈と不快の度を加えるに従って受ける報酬はますます少なくなり、最後にもっとも精根をすりへらす肉体労働に至っては、働いて生活必需品を得ることすらも確実に期待することはできない。もしこのような私有財産の制度と共産主義といずれを採るかということであれば、共産主義の難点は、大小すべてのものを合しても、なおはかりの上に落ちた羽毛に過ぎないであろう。」(Mill 1848:208)

ここに示されているミルの社会的公正に関する所見は、福祉思想の視点から『経済学原理』を考察する上で大変重要な点である。例えば、ミルは同書の中で「公益目的のためという中で第一に重要なものは、人民の生存 (the subsistence of the people) そのものである。誰も自分が生まれてきたことに対する責任はないのであるから、現在すでに生存しているすべての人びとに充分なものを与えるために、充分以上のものをもっている人たちが、どのように大きな金銭的犠牲を払ったとしても、その犠牲が過大な犠牲であるということはない」(Mill 1848:363) と論じている。

また自伝の中でも、「働かざる者食うべからず (do not work shall not eat) という掟が、単に貧困者ばかりではなくすべての人に適用される時代、労働の生産物の分配が、現在の非常な程度にまでそうであるのとは異なり、生まれの偶然によって左右されるのではなく、すべての人の認める公正の原理 (principle of justice) に基づく協定によってなされる時代、人間が勤勉に働いて生じた利益が、他を排して自分たちだけのものになるのではなく、自分たちの属する社会全体と共有されるということが、もはや不可能でもなくまた不可能と考えられもしない時代、そういう時代を待望したのである」(Mill 1873:175) と述べている。

第4篇の終章「労働者階級の将来の見通し」(On the Probable Futurity of the Labouring

Classes)の第6節は、次のように締めくくられている。「このようにして、すでに蓄積されている資本は、直接的な方法と自然的な道程を経て、最終的に産業に参与したすべての人々の共同財産となるかもしれない。その結果として起こり得る変化は、(もちろん男女両性の権利は平等であり、組合の統治にも共に同等に参加できると仮定して) 今日予想できる限り社会的公正に最も近づくものであり、すべての人の福祉 (universal good) にとって最もよい産業制度となる。」(Mill 1848:p.792) すなわち、ここでミルは、労働者階級に対する保護政策はもはや無効であり、労働者は、自らの文化活動・労働組合活動・政治運動等によってのみ、自己の将来の福祉を増進し得ると論じている。

また第5篇の終章「自由放任あるいは不干渉主義の原則の根拠と限界」(Of the Grounds and Limits of the Laissez-faire or Non-Interference Principle) では、自由放任主義をもって一般原則とすべきであるが、教育等については政府の積極的な活動を正当化して次のように論じている。「社会の人々の仕事に対して公共的権力で干渉することは最小限に留めるべきであり、…一般には自由放任を原則とすべきであり、この主義を放棄すると必ず大きな弊害が生じる。(しかしながら)商品の品質が社会にとって重要であれば、国家の共同利益を代表する権威者が、ある種の干渉をある程度まで行うことはよいことである。…政府は小学校に補助金を与え、例えば貧困児童に対しては無料または少額で学校に通えるようにすべきである。」(Mill 1848:950, 953, 956)

これらのミルの『経済学原理』の主張から、彼が福祉国家論または厚生経済学の萌芽を内包していたことは明らかである。

第2節 ミルと社会主義思想

ミルは、『自伝』(Autobiography)の中で、「簡単にいえば私は、民主主義者ではあったが決して社会主義者ではなかったのだ。(しかしハリエット・テイラー (Harriet Taylor) と)二人になってから、私一人の時と比べると、民主主義者からは大分遠くなっていた」(Mill 1873: 175, 括弧内は筆者)と述べ、さらに「…我々の前進の究極の理想は、はるかに民主主義の域を越えて、はっきりと社会主義者という一般的呼称の中に我々を置くものであった」(Mill 1873: 175)と言及している。そこで筆者は本節でミルが影響を受けた社会主義思想について考察したい。

ミルとハリエット・テイラーは、社会主義に関する論点を検討・吟味し、1869年頃から社会主義に関するいくつかの論文を執筆していた。ミルはそれを基礎として『社会主義』(Socialism)と題する書を計画していたようであるが、この計画は完成せず、彼の死後1879年、義理の娘ヘレン・テイラー(Helen Taylor)の手で遺稿が集められ、『社会主義論集』(Fortnightly Review)誌上に公表される運びとなった。

ミルは、この『社会主義論集』で、所謂社会主義理論を適切にまとめて紹介している。彼が紹介した社会主義者はフランスのルイ・ブラン(Louis Blanc)²やシャルル・フーリエ(François Marie Charles Fourier)³等であり、特に1830年代から1840年代にかけて活躍したフーリエ主義運動の中心人物に関する詳細な記述が残されている。また『自伝』の中には次の文章がある。「実は私のこういう見解は、サン・シモン派社会主義者たち (Saint-Simonians) の所説を考察することによって私の頭によびさまされた考え方からその一部は発したものだ。」(Mill 1873:187)

ミルは幼少期よりフランスの思想界に関心をもっており、彼らの空想的社会主義を高く評価し、その学説に対して敬意を表していた。「社会の害悪を列挙するにあたって、昔の平等主義者は、いつも道徳的立場からする現存社会体制の批判という線で留まってしまっていた。ところが、彼らの後継者である現在の社会主義者 (空想的社会主義者) は、一層鋭い見透しをもっており、社会の分析を一層進めている。」(菊川1966:141)

関嘉彦は次のように分析する。「彼 (ミル) がとりあげているのはロバート・オーエンやルイ・ブランなどの極端な形 of 社会主義である共産主義、すなわち生産手段の共有化と生産物の平等化、労働の割当制を説く考えと、サン・シモン主義やフーリエ主義らの社会主義、すなわち私的金融利益の労働刺激を残しつつ生産手段の公共化のみを主張する考えである。(考察の結果) 共産主義は生活が画一化されるゆえ、個性の進展という点から望ましくない。これに反して狭義の社会主義はその欠点を免かれている。特に私有財産とその相続を認めているフーリエ主義は、各成員の最低限生活を保証し、残りの生産物を労働の量、出資額および才能の程度で分配する点ですぐれている。」(関嘉彦1979:59, 括弧内は筆者)

また、ミルが24歳の時出会い20年間以上敬愛し続けた富裕な薬商ジョン・テイラー (John Taylor) の妻、ハリエット・テイラーからの影響を無視することができない。ハリエット・テイラーは、社会を少しでも住みよくして、生活問題を抱え苦慮している人たちを助けたいという情熱を秘めていた女性であった。特に婦人参政権の主張や社会主義や労働者階級への好意的考え等のミルの思想は、もともとミル自身にあったものであるにしても、ハリエットにより強化されたものであると考えられる。

それでは、ミルの社会主義に対する見解はどのようなものであったのであろうか。ミルは、社会主義に対してあくまでも慎重な態度を取っている。まず社会主義を小社会で実験し、成功したならば大社会にそれを拡大するのが安全であると説いている。その意味からすると、彼は社会主義の理想には共鳴していたものの、社会主義理論を統一的に理解しようとはしていなかったと考えられ、その中に含まれている理論を「仮定」として、個別的に検討しようとしていたと思われる。

『社会主義論集』の中でミルは、「現在の経済システムは、もしそれが社会主義者の原理に

沿って若干修正された場合において、その価値が証明されるであろう」とし、「自らの個人的意見の力で社会革命の計略をしている人々は、いくつかの実験に基づく証明がなされても、なお確固たるものを形成していないことを認めるに違いない」と述べている。(Mill 1879:382, 513)

菊川忠夫も指摘しているように、「社会主義に関するミル自身の考察は不徹底であり、その思想は過渡的な折衷的なものを代表していた」(菊川1966:93)のかもしれない。ただ近年レトウィンが分析しているように、確かにミルは徹底的に社会主義の国家について検討しているわけではないが、社会主義の利益に注意を向ける努力をし、それによって多くの国の社会主義者が、ミルを同じ主義を有する者として受け入れている事実を無視することはできない。(Letwin 1998:312)

またその根拠を明らかにするためには、ミルの社会主義思想が、その後どのように伝承されたかを探究することが必要であると考えられる。

まず、注目すべき事項は19世紀末からイギリスで起こった社会主義の台頭である。社会主義の台頭の契機となったのは、1879年にアメリカで出版されたヘンリー・ジョージ(Henry George)の『進歩と貧困』(*Progress and Poverty*)である。同書は、資本主義社会の害悪に対する具体的な救済策として、土地に対する単一租税を提唱したもので、イギリスでは1881年12月に出版され、進歩的な労働運動家の間で広く読まれた。

ヘンリー・ジョージは、ミルの土地改革論の思想を断行して、『進歩と貧困』を公刊したといわれている。

ミルは、父ジョン・ミル(John Mill)の指導により、デイヴィット・リカード(David Ricardo)の地代学説に基づき、土地改革論を理論的に構築していた。彼は『経済学原論』の中で「土地は本来全部の人類が相続すべき財産である。地代のように何も所有者の努力を俟たずして絶えず増加する傾向にある所得は、国家がその増加分を使用するとしても、それは私有財産の基礎原理を侵害するものではない。それは本来誰からも何も取るものではないからである」と論じている。(Mill 1848 :Chap. 2. §5. §6.) マックス・ベア(Max Beer)は、ミルの土地改革論と社会主義の見解との関連性に触れながら、「土地財産に関するミルの観念は社会主義の思想に類似している」(Beer 1948:238)と述べている。

ヘンリー・ジョージがミルの影響を受けて『進歩と貧困』を執筆したことは、同書の随所でミルの引用があることから明らかである。ヘンリー・ジョージは『進歩と貧困』の第8篇「救済策の応用」(Application of Remedy)の第4章「賛成と反対」(Indorsements and Objections)で、「ミルは、土地の現在価値に対する地主らの権利を妨害することをはっきりとよくないと考えるけれども、将来の増加全部を自然権によって社会に属するものとして徴収することを提案している」(George, H., 1879:300)⁴と論じている。

第2章 ミルが初期のフェビアン社会主義に与えた影響

第1節 ミルとフェビアン協会

本章では、本稿の目的である初期のフェビアン協会のメンバーへの影響を検証する。まず、フェビアン協会について簡潔に述べたい。

イギリスの社会主義団体の代表的組織であるフェビアン協会 (Fabian Society) は、1884年に組織され、数多くの刊行物を通じて民主社会主義 (Democratic Socialism) を市民に主張した。フェビアン協会の名称は「好機が来るまで待つ」というローマの将軍フェビウスの戦術にまつわる故事から取ったもので、協会の漸進主義への信念を表していた。

ロバート・ピンカー (Robert Pinker) が、「イギリスのフェビアン社会主義の理論的起源は、社会主義に加えて古典的政治経済学と功利主義にも由来している」(Pinker 1971:87-88)と指摘しているように、初期のフェビアン協会の理論的指導者は、ミルの自由主義思想の影響を受け、「人間の利益にかなうあらゆる事柄」について研究し合う「探求協会」(Zetetical Society)⁵を通じて結束している。初期のフェビアン協会の執行部となるジョージ・バーナード・ショウ (George Bernard Shaw) とシドニー・ウェップ (Sidney Webb) も例外ではなく、フェビアン協会が創設される以前の1881年に探究協会⁶で知り合っている。(金子1997:86)

ミルはイギリス社会主義を作り上げた諸教説の混合物の中に一つの伝統を確立したと考えられ、特にフェビアン協会の教義を形成する上で重要な働きをしたと考えられる。すなわちジョージ・リヒトハイム (George Litchheim) が指摘するように、ミルは大陸における初期の社会主義者と自由改良主義者 (liberal reformers) と労働党政治を支えるフェビア社会主義の改革者 (reformist Fabian labour politics) の発展を結びつける枢要な人物であった。(Litchheim, G., 1969:139)

ミルは『自伝』の中で「将来の社会問題は、どうすれば個人の行動の最大の自由を、地球上の原料の共有及び共同の労働の利益への万人の平等な参加ということと一致させ得るか、であると我々は考えた」(Mill, 1873:175)と述べているが、これこそイギリス社会主義の中心思想である。フェビアン社会主義者は、この自由と協力及び平等とを調和せしめる考え方を基礎として、ミルが躊躇した生産を公有公営化するという手段で⁶、議会の立法を通じて実現しようとした。彼らの主張は、知識を浸透させれば議会制の範囲内で社会主義国家を実現できるという楽観的側面を有していたものの、社会調査に基づく政策立案、啓蒙活動を通じて、生産手段の私有が所得不平等の源泉を形成していると批判し、漸進主義による公有化を訴えた。

ジュリアス・ウエストは、「社会は十分に考慮を払った上で、ある特殊な所有権が公共の福祉を妨げるものであると判断される時には、これを廃止したり変更したりする権利を完全に

もっている。…ミルは、社会主義的思想の将来の進化の現実的な線に非常に近いものを描き出している。もし彼がもう10年間生きていたならば、フェビアン協会の設立者の一人になっていたことはほとんど確実なことであっただろう」(West 1913:21) と示唆している。

第2節 シドニー・ウェッブ

シドニー・ウェッブの父親のチャールズ・ウェッブ (Charles Webb) は会計士だったが、彼の所得は地元の商店の帳簿づけで入るわずかな額の不定期収入だけであった。またチャールズは健康が優れず、新聞を丹念に読んだり、議会の討論を検討したり、あるいは地元の教区委員、貧民救済委員として、社会奉仕と政治に参加してその生涯の大半を過ごした。その中でも特にチャールズが情熱をもって支持していたのが、1865年に議会に立候補したミルであった。(MacKenzie 1977:57) シドニーが父から受けた影響の中で最も大きかったのは、ミルに対する理解と崇拝であったとも考えられる。

シドニーは、1882年上級公務員試験の難関に合格すると、陸軍省と植民地省で働いたが、翌1883年ケンブリッジ大学のトリニティ学寮 (Trinity College) から国際法でヒューエル奨学金 (Whewell scholarship) を受ける資格を与えられた。ただ、それを受けるためには現在の公務員の地位を捨てなければならず、シドニーは相当悩んだ末に、父親が崇拝するミルのように、研究や思索のための余暇と仕事を両立させるためには、公務員が最適の場所であると思い、ケンブリッジ大学からの奨学金を断っている。(MacKenzie 1977:58)

このように父からの影響もあり、シドニーは次第にミルに傾倒するようになっていった。シドニーは、彼の初期の代表的著作『イングランドの社会主義』(Socialism in England)で、ミルの見解を多用し、次のように高く評価している。

「現在の政治経済学者に著しい影響を与えた人物はミルである。彼は社会主義者の計画に役立つ公的な思考力を徐々に準備し、特に価値の領域における『働かずに得た利益』に関心を向けていた。」(Webb 1890:19) さらに「社会主義に向かう方向は経済学の文献においても、著しく目立って明らかになってきている。1848年に出版されたミルの『経済学原理』は、明らかに古い経済学と新しい経済学の間境界線を引いている。ミルの著作は版を追うごとにその雰囲気において、より社会主義的になり、彼の死後出版された『自伝』の中では、世界に対して完全な社会主義を標榜するために、単なる政治的民主主義を完全に否定する姿勢を明らかにしている。…急進派社会主義者たちは、ミルの著書から最も強い刺激を与えられている。」(Webb 1890:83,85)

またシドニーは、労働時間の短縮の経済的效果について早くから関心を払っていた。彼は1889年5月の『フェビアン・トラクト』(Fabian Tract)⁷と同年12月の『コンテンポラリー・レビュー』(Contemporary Review)に労働時間の制限に関する論文を寄稿している。シドニ

一は「高まりつつある民主主義の風潮が、『8時間労働法案』(An Eight Hours Bill)を避けられないものになっている」(Webb, S., 1889:859)と指摘した上で、労働時間の短縮がもたらす雇用の増加と失業の減少を理論的に検証している。

実はそのヒントもミルから与えられたものであると考えられる。ミルは次のように述べている。「国民の間に、あるいはその大多数の間に、この(賃金)低下に対する決然たる反抗—既定の生活水準を保持しようとする決意—のない場合には、極貧者層の状態は、進歩的な国においてさえ、その甘んじて耐え得る最低のレベルまで下がるものである。」(Mill:1848:453, 括弧内は筆者)

そしてこの見解は、妻ビアトリスと共に社会保障の基礎となるナショナル・ミニマムを最初に提唱した共著『産業民主制論』(*Industrial Democracy*)において結実したと考えられる。

第3節 ビアトリス・ウェップ

次にシドニーの妻であるビアトリスは、ミルからどのような影響を受けたのであろうか。ビアトリスとミルには二律背反の命題に苦悩した共通の生育暦がある。

ミルは1826年から約1年間精神的危機に陥った。彼が危機状態に陥った原因の一つは、過労によるノイローゼと考えられるが、もう一つの有力な原因は、18世紀的合理主義に対する彼の反発心にあったといわれている。(菊川1966:39-40)

ビアトリスの内面世界において葛藤を繰り返していた資本主義精神の二大原理(禁欲原理と快楽原理、欲望の組織化・合理化と解放・自由放任、超現実的倫理と世俗的倫理)はミルを苦しめた二律背反の命題に通じるものであった。(金子1997:32-34) 名古忠行の分析によれば、結果的に「ミルとビアトリスは、資本主義に代わる社会主義思想に救いを求めた」(名古1987:113) ことにより、その精神的苦悩から抜け出している。

ビアトリスは、「ベンサムの手紙を一文字も読んだことがない」と主張しているが、ハーバート・スペンサー(Herbert Spencer)の著作を通じて、彼の「最大多数の最大幸福」の原理を学んでおり、ベンサムの後継者であり、古典派経済学の集成者であるミルに興味をもっていた。

ビアトリスに与えたミルの影響の中で最も大きなものは、協同組合の考え方ではないかと考えられる。ビアトリスは、28歳の時に自らの経済学研究のためにミルの『経済学原理』を読んでおり、ミルは、同書の中で労働者階級が人口の抑制をはかり、オーエン主義者が提案したように協同組合を形成し自ら事業にあたる方法と資本家との協同企業への参加とを奨励している。またそのようになれば労資の階級対立も緩和されるであろうと期待している。

ビアトリスが協同組合運動に関心をもったのは、1883年ベイカップを訪問した時であったと考えられるが、彼女が協同組合運動の研究を本格的に始めようと決意したのは、苦汗制度

の調査に取りかかって間もなくの1887年11月であり、それは彼女がミルを含む一連の経済学研究を終えた時期と一致する⁸。

1886年7月18日、ビアトリスは日記に次のように書き残している。「ミルの『経済学原理』と『論理学体系』(*A System of Logic*)を読み終え、フォーセツト(H. Fawcett)の『政治経済学』(*The Political Economy*)を習得し、アダム・スミス(Adam Smith)、デイヴィット・リカード、ウィリアム・スタンレイ・ジェヴォンズ(William Stanley Jevons)、アルフレッド・マーシャル(Alfred Marshall)の方法・目的・仮説を理解した。」(MacKenzie, ed., 1982:174)

マーガレット・コール(Margaret Cole)も指摘しているように、「ベンサムやミルの哲学を社会主義としてフェビアン的に再述したものが、労働階級の諸制度に関するビアトリス自身の経験及び近代産業社会の事実と融合した時、彼女ははじめて哲学的安息所を見出した」(Cole 1945:23)と考えられる。また、シャーリー・ロビン・レトウィンも「ビアトリスは自ら科学を学んで以来、組織的な全体としての社会の捉え方に確信をもっていた。それは、ミルが発展させることに失敗し、頭の中で準備をしていたと思われる社会学に属するものである」(Letwin 1998 :p.xviii)と論じている。

ビアトリスはミルによって再形成された功利主義から多くの影響を受けていたと考えられる⁹。

第4節 G. D. H. コール

ジョージ・ダグラス・コール(George Douglas Cole, 以下、G. D. H. コールと略す)は、オックスフォードのベイリアル・カレッジ(Balliol College)の学生時代から社会主義に関心をもち、1908年には独立労働党に入党し、同年フェビアン協会にも加入した人物である。1915年にG. D. H. コールは、「全国ギルド連盟」(National Guild League)の設立に参画し、その指導者の一人となる。

G. D. H. コールは、共同社会への寄与が生産の唯一の基準であり、利潤の観念は排除されるべきであると主張しながらも、その枠内における最大限の社会的自由を要求し続けた。彼は次のように論じている。「私は社会主義者であるために私の考えが少しでも個人主義者でなくなったことはない。実に私は社会主義を一つの目的と見ることなく、個人の能力と諸自由との拡大への手段として社会主義を見るのである。」(Cole, G. D. H., 1950:156)

ここでG. D. H. コールが示した「個人の能力と諸自由の拡大」という言葉の中には、個人の人格的發展という意味が含まれていて、その場合の彼の中心概念は、ジェレミイ・ベンサムの幸福感であり、「最大多数の最大幸福」であったことは注目に値する。ただG. D. H. コールの場合、「ベンサムの教訓に従う者は、個人の自由に対するすべての悪い干渉を取り払う

だけではなく、個人の幸福を拡張するよい形態の干渉を打ち立てる仕事をなすべきである」(Cole, G. D. H., 1950:153)と説いているように、ベンサムとは異なった見解に基づいてその目標達成への道を提示している。

ギルド社会主義に傾倒していたG. D. H. コールは、肉体及び知識労働者がギルドを組織し、生産者の代表機関となって、生産・経営の管理についてのすべての職能を掌握することを提案している。ギルドは自治制を取るため、労働者に対して自分の働く産業の管理に参加する機会が与えられ、その結果、労働者の個性を適当に表現する場が与えられる。そしてG. D. H. コールは、これらすべての活動において労働組合が指導的な役割を果たすべきであると考えていた。社会変革の過程が政治的というよりも経済的なものであると考えたG. D. H. コールは、同業組合こそが所期の全国ギルドを創設するために最も適当な組織であると認識していた。(MacKenzie, N., 1949:98)

これに対して消費については、国家を代表機関とし、消費者の利益を増進させると共に生産者の専制を阻止するべきであると主張している。G. D. H. コールは、すべての消費の利害が大体において同一であるという判断から、これを国家または国家の名ではない同様の原理で構成される包括的団体の機能に所属させるべきであると考えていた¹⁰。

このように、生産者民主制を強調するG. D. H. コールの見解の中に、ミルの影響があったのではないかと推測される。ミルは『経済学原理』の中で次のように述べている。

「協同組合が十分に増加した時には、最も卑しい労働者以外は一生を単なる賃金労働者に甘んずる者はいなくなるであろう。私的資本家も組合も、すべての労働者に利潤が分配することの必要性を痛感するであろう。組合主義を通じて、社会はいつか必ず意外と早い段階で次のようになるであろう。すなわち社会の個人は自由・独立となり、しかも同時に集団生産の道徳上・知能上及び経済上の利益がこれに伴うであろう。少なくとも産業部門において、社会に勤労・遊惰の二階級の区別を廃止し、自分の勤労による正当な享有以外、あらゆる社会的差別を消し去り、民主的志望を実現するであろう。」(Mill 1848:791)

また、1869年に『社会主義論集』においてミルは「(労働の) 買い手と売り手との間の辛抱比べの争いにおいては、被雇用者間の確固たる団結の他には何ももの、彼らに雇用主に対して闘って成功する機会を与えるものはない」(Mill 1879:42, 括弧内は筆者)と述べている。これらの見解は、産業民主主義ないし労働者の経営参加の考えであり、ミルの思想がフェビアン協会を通じてコールに伝承されたものであると考えられる。

おわりに

ミルの幼少時代には人文科学の研究が最も重要視され、彼もまた人間性の研究に最大の重点を置いていた。ミルは、「満足した豚であるより、不満足な人間であるほうがよく、満足した愚か者であるより不満足なソクラテスであるほうがよい」(Mill 1861:281)と『功利主義論』(*Utilitarianism*)の中で述べたように、彼にとっては人生の最高価値は、物質的満足ないし感官的快楽ではなく、人間がもつ能力の最大限の発展であったと考えられる。そして彼は、この最高価値達成のため精神的自由を主張することに生涯を捧げたが、自由放任の経済がそれに最善の方法であるとは考えていなかった。

本稿の考察において、ミルが社会主義に賛成であったか否かは、断定することができなかったが、1848年以後彼が目指したものは、自由を維持しながら、平等化と協業化とを進めていくことであった。彼は、フェビアン協会のメンバーのように、既存社会を破壊すれば自然と矛盾のない社会が訪れると信ずるほど空想家ではなかったし、自由を犠牲にした完全な計画化を主張するほど、自由の価値に無頓着でもなかった。

ジュリアス・ウエストは、「経済学者としてのミルの偉大な地位は、彼が考えていたように、自身が関心を示した分配の発見に起因するのではなく、あるいは他の人々が考えたように、価値についての彼の取り扱いによるのでもない。それは、彼の人間性と経済学への人間性の要素の導入によるのである」(West 1913:11)と論じている。

ミルが福祉の実践活動に積極的であったことはあまり知られていないが、彼は1834年の救貧法改正以降基本原則の一つになったワークハウスを改革するキャンペーンに関与していたし、議会における「都市貧困法案」(Metropolitan Poor Bill)を意欲的に支持する姿勢を示していた。この法案は1867年に成立したが、それはヴィクトリア法体系に対する大きな集合主義的追加であったとロバート・ピンカーも指摘している。(Pinker 1971:69)

自由放任主義の下で私有財産や自己優先がもてはやされる時代に、社会全体の幸福を見据え、集合主義の見地から他者への役割を強調したミルは、A. V. ダイシー (A. V. Dicey) も指摘するように「自己利益が格言であった最大幸福の原理」を、自己犠牲と他者へのサービスという「教訓」に変容させたといえる。(Dicey 1962:430)

ミルは、彼自身もそう解したように、しばしば過渡期の思想家として特徴づけられている。その過渡期の特徴が、個人主義から集産主義か、自由主義から社会主義か、経験主義から理想主義かは論者によって異なるが、ミルはそのような過渡期に現れる種々の相反する思想をできる限り理解し、それらを摂取し整理することによって、二つの交替する時代の間の橋渡しをしたと考えられる。

その潮流の中で、人間性の要素を導入した論理をフェビアン協会が受け継ぎ、ナショナル・ミニマムの提唱や救貧法の廃止に向けた努力がなされ、また放任した生産の領域にも、人為

的統制を加えようとする見解が自由主義者のジョン・メイナード・ケインズ（John Maynard Keynes）に引き継がれ、計画と競争とを総合する混合経済が生起した。

人類の進歩と幸福とを念願し、一身の利益と快楽をむさぼる利己主義者を軽蔑していたミルは、貧困問題の原因を除去するために、自由放任よりも国家介入の方が必要であると主張した最初の経済学者である。本稿では、彼の思想が初期のフェビアン協会のメンバーを通じて、福祉国家の理念に継承されていく過程の一部を明らかにしたにすぎないが、19世紀中期に「古典派」から「新古典派」への分水嶺の役割を担い、社会福祉政策の発展の基礎となる重要な主張を展開したミルの功績を再評価する試みが必要であると考えられる。

<資料>

J.S.ミル, シドニー・ウェブ, ビアトリス・ウェブ, G.D.H.コール関連略年譜

	J. S. ミル	シドニー・ウェブ	ビアトリス・ウェブ	G. D. H. コール
1806年	ジェームズ・ミルの長男として5月20日, ロンドンで誕生。			
1809年	英才教育が開始される。			
1826年	ミルの「精神的危機」始まる。			
1830年	ハリエット・テイラー夫人との交際が始まる。			
1843年	『論理学体系』刊行。			
1848年	『経済学原理』刊行。			
1851年	テイラー夫人と結婚する。			
1858年	テイラー夫人がアヴィニオンで逝去する。		父リチャード・ポッターと母ローレンシナの八女として1月22日, グロスターで誕生。	
1859年	『自由論』刊行。	父チャールズ・ウェブと母エリザベス・メアリー・スタシーの次男として7月13日, ロンドンで誕生。		
1861年	『代議政治論』刊行。 『功利主義』刊行。			
1865年	ウェストミンスター地区より下院議員選に立候補し当選する。	ミルの信奉者であった父チャールズがミルの選挙活動を支援する。		
1868年	下院議員選挙に落選。			
1869年	『女性の解放』刊行。			
1871年	ジョージ・オッジャーに手紙を送る。			
1873年	『自伝』刊行。 アヴィニオンにて逝去する。(享年65歳)			
1879年	義理の娘ヘレン・テイラーの手で遺稿が集められ, 『社会主義論集』刊行。			
1881年		ミルの自由主義思想を受け継いだ「探究協会」でバーナード・ショウと出会う。		
1882年		上級公務員試験に合格。		
1883年		ケンブリッジ大学のトリニティ学寮からヒューエル奨学金を受ける資格が与えられるが, ミルの生き方に学んで奨学金を断る。	農家の娘ジョーンズに変装してランカシャーのベイカップを訪れる。	

	J. S. ミル	シドニー・ウェッブ	ビアトリス・ウェッブ	G. D. H. コール
1886年			「東部ロンドンの失業者に関する一婦人」が『ペル・メル・ガゼット』紙に掲載される。 ミルの『経済学原理』と『論理学体系』を読む。	
1888年			苦汗制度の調査の後、協同組合に関する研究に取りかかる決意をする。	
1889年		『フェビアン・トラクト』に「8時間法案」を掲載する。	チャールズ・ブースの『ロンドン市民の生活と労働』に「ドック」「洋服仕立て業」等が掲載される。	ジョージ・コールの息子として9月25日にイーリングで誕生。
1890年		ビアトリスと出会う。 『イングランドの社会主義』刊行。 『フェビアン・トラクト』に「8時間法案のための請願」を掲載する。	シドニーと出会う。 社会主義者になる。	
1891年		『フェビアン・トラクト』に「8時間法案の申し立て」を掲載する。 植民地省を退職し、ロンドン市議会議員となる。	『英国における協同組合運動』刊行。	
1892年		ビアトリスと結婚する。	シドニーと結婚する。	
1894年		『労働組合運動の歴史』ビアトリスとの共著で刊行。	『労働組合運動の歴史』シドニーとの共著で刊行。	
1897年		ナショナル・ミニマムを唱えた『産業民主制論』をビアトリスとの共著で刊行。	『産業民主制論』をシドニーとの共著で刊行。	
1905年			「救貧法並びに貧困救済に関する王立委員会」の委員としてビアトリスが選出される。	
1908年		将来の失業問題に関する証人として「救貧法並びに貧困救済に関する王立委員会」の証人席に着く。		独立労働党に入党し、同年フェビアン協会にも加入する。
1909年			「救貧法並びに貧困救済に関する王立委員会」が終了し、『少数派報告』を提出する。	
1915年				「全国ギルド連盟」の設立に参画し、その指導者の一人となる。

出典：金子光一（1997）『ビアトリス・ウェッブの福祉思想』ドメス出版

菊川忠夫（1966）『人と思想 J. S. ミル』清水書院

Letwin, S. R., (1998) *The Pursuit of Certainty: David Hume, Jeremy Bentham, John Stuart Mill, Beatrice Webb*, Liberty Fund, Inc. 等から筆者作成。

註

1 『経済学原理』は版を重ねるごとに改訂されているが、最も著しく改訂されたのは、「労働者階級の将来の見通し」であり、ここの執筆にはハリエット・テイラー (Harriet Taylor) が最も関わったと伝えられている。ミルは『自伝』の中で次のように告白している。「私の著書の中で、妻の応援が顕著にあった最初の書物は『経済学原理』であった。…『経済学原理』の中で、他のどの章にもまさって世論に大きな影響を与えた『労働階級の将来の予測』の第1章は、完全に妻に負うものであって、同書の最初の草稿にはあの章はなかったのである。妻は、そのような章の必要なこと、それがなくては全体がいかにも不完全であることを指摘した。妻が、私にそれを書かせたもとであり、その章の比較的概論的な部分、労働階級の正当な生活条件に関する2つの相対立する説を述べてそれを評論しているあたりは、完全に妻の考えを解説したものであり、時には言葉までが彼女の口から出たものであった。」(Mill 1873:186-187)

2 フランスの改良主義的な国家社会主義者。国家が出資し、労働者が経営に当たる生産協同組合を設立し、資本家の私企業を競争で圧倒し、これを吸収していけば大資本の支配から職人や小生産者を解放し得るとした。

3 資本主義社会の矛盾である恐慌・失業・貧困などの問題を痛感し、資本主義の欺瞞性と掠奪性を指摘した。彼の考えた理想社会は、ファランジュ (Phalange) と称する協同組合である。そこでは、生産は社会的に統制され、共同生産消費による一応の共有制が行われているが、彼は徹底した平等論者ではなく、私有財産も否定していない。

4 ウィリアム・ロブソン (William A. Robson) は、福祉国家の基底にある理念は、幾つかの異なった起源を有しているとしながら「ジョン・スチュアート・ミルやヘンリー・ジョージのような経済学者たちが、社会の良心を呼び覚ますために払った努力が大きく寄与している」(Robson 1976:p. 11) とミルとヘンリー・ジョージを同列に扱っている点は興味深い。

5 「探求協会」は、1897年弁証協会 (Dialectical Society) の附属機関として設立された協会である。弁証協会は、社会情勢等について弁論によって論証することを目的とする伝統的な知的ソサィアティである。

6 国営企業の問題については、一般的に言えば、かれは機能の多様性は不能率をもたらすにちがいないとの理由で、政府干渉のいかなる拡張にも反対したにもかかわらず、沈黙を守っている。(West 1913:19)

7 シドニーは8時間労働問題について3つの論文を『フェビアン・トラクト』に寄稿している。‘An Eight Hours Bill. In the Form of an Amendment of the Factory Acts with Further Provisions for the Improvement of Conditions of Labour’, *Fabian Tract*, No.9, 1889. ‘A Plea for an Eight Hours Bill’, *Fabian Tract*, No.16, 1890. ‘The Case for an Eight Hours Bill’, *Fabian Tract*, No. 23, 1891

8 ピアトリス・ウェップの経済学の研究及び協同組合運動の研究については、(金子1997:58-61, 76-82)を参照してほしい。

9 ピアトリスは、後にシドニーと共に労働組合に関する研究を行うが、その集大成である共著『労働組合運動の歴史』(*The History of Trade Unionism*)の中で、労働組合の運動家たちからなっていた労働議員選出同盟 (Labour Representation League) が、下院に労働者の選出を確保しようと努力を重ねていた事実に触れ、1869年から1870年にかけて積極的に活動したジョージ・オッジャー (George Odger) を評価している。そのジョージ・オッジャーにミルは、次のような手紙を送っている。

「オッジャー氏、労働者たちが、自由党のこのような排他的感情を打破するために、保守党員の下院への選出を許したことは、まったく正当なことで、これは何らかの原則を犠牲にしないで、成し遂げられることです。労働者の政策は、労働者議員の選出を主張し、そして成功しなかった場合には、多

数派である自由党に重大な脅威を与えるまで、保守党員を下院に送り込むことを許すことです。そうなれば、もちろん、自由党は喜んで妥協に応じ、そして少数の労働者議員の下院への選出を許すことになるでしょう。」(February 13, 1875) (Webb, S.&B., 1894:287-288)

10 ギルド社会主義とフェビアンの関係については、金子光一(2000)「市民社会の民主制のあり方に関する一考察 —ギルド社会主義とフェビアン社会主義—」『淑徳大学社会学部研究紀要』第34号(15-28頁)を参照してほしい。

文献

- Beer, Max (1948) *A History of British Socialism*, George Allen & Unwin
- Cole, G. D. H., (1950) *Essays in Social Theory*, Oldbourne Book Co. Ltd.
- Cole, G. D. H., (1920) *Social Theory*, Methuen & Co. Ltd.
- Cole, M., (1945) *Beatrice Webb*, Longmans, Green & Co. (=久保まち子訳(1982)『ウェブ夫人の生涯』誠文堂新光社)
- Dacey, A. V., (1962) *Lectures on the relation between Law and Public Opinion in England During the Nineteenth Century*, London Macmillan
- George, Henry (1898) *Progress and Poverty—An Inquiry into the Cause of Industrial Depressions and of Increase of Want with Increase of Wealth. The Remedy.* (1931) Fifty-Second Anniversary Edition. The Henry George Foundation of Great Britain (=1991, 山崎義三郎訳『進歩と貧困』日本経済評論社)
- Ginsberg, Morris, (1959) 'The Growth of Social Responsibility' in *Law and Opinion in England in the Twentieth Century*, Stevens and Sons Ltd., London
- Letwin, S. R., (1998) *The Pursuit of Certainty: David Hume, Jeremy Bentham, John Stuart Mill, Beatrice Webb*, Liberty Fund, Inc.
- Litchheim, George, (1969) *The Origins of Socialism*, Weidenfeld and Nicolson
- MacKenzie, N., (1949) *Socialism -A Short History-*, Hutchinson & Co. Ltd. (=杉本俊朗訳(1953)『社会主義小史』如水書房)
- MacKenzie, N. & J., (1977) *The First Fabians*, Weidenfeld and Nicolson (=土屋宏之・太田玲子・佐川勇二訳(1984)『フェビアン協会物語』ありえす書房)
- MacKenzie, N&J., ed. (1982) *The Diary of Beatrice Webb Volume One 1873-1892 -Glitter Around and Darkness Within-*, LSE., Virago Press Ltd.
- Mill, J.S., (1848) *Principles of Political Economy*, London: John W. Parker, West Strand, New edition (1909) London: Longmans, Green & Company, Reprinted (1987) by Augustus M. Kelley Publishers (=戸田正雄(1939)『経済学原理』春秋社)
- Mill, J. S., (1861) *Utilitarianism*, Everyman's Library, New Published (1987) Penguin Group (=伊原吉之助訳(1979)「功利主義」『世界の名著49ベンサム・J. S. ミル』中央公論社)
- Mill, J. S., (1873) *Autobiography*, , Penguin Books (1989) (=1960, 朱牟田夏雄訳『ミル自伝』岩波文庫)
- Mill, J. S., (1879) "Chapters on Socialism," in *Fortnightly Review* (February, March, April, 1879)
- Morris, W., (1894) "How I Became a Socialist" , in *Political writings of William Morris /* edited and with an introduction by A. L. Morton (1973)
- Parris, (1952) quoted from R. A. Lewis, *Edwin Chadwick and the Public Health Movement 1832-54*, Longmans

- Pinker, R. A., (1971) *Social Theory and Social Policy*, Heinemann Educational Books Ltd. (= 1985, 岡田藤太郎・柏野健三訳『社会福祉学原論』黎明書房)
- Robson, W. A., (1976) *Welfare State and Welfare Society*, George Allen & Unwin Ltd., (= 1980, 辻清明・星野信也訳『福祉国家と福祉社会－幻想と現実－』東京大学出版会)
- Webb, S., (1889) 'The Limitation of the Hours of Labour', *The Contemporary Review*, December
- Webb, S., (1890) *Socialism in England*, Swan Sonnenschein, (1987) LSE Gower Publishing Company Ltd.
- Webb, S.&B., (1894) *The History of Trade Unionism*, Longmans, Green & Co. (= 荒畑寒村監訳, 飯田鼎・高橋汎訳 (1973)『労働組合運動の歴史』(上・下) 日本労働協会)
- West, Julius (1913) "John Stuart Mill" in *Fabian Tract* No.168, Biographical Series No.4, Fabian Society (= 福原行三訳「ジョン・スチュアート・ミル」堀経夫・大前朔郎監訳 (1978)『イギリス社会思想家伝』ミネルヴァ書房)
- 石上良平 (1957)『英国社会思想史研究』創文社
- 金子光一 (1997)『ピアトリス・ウェップの福祉思想』ドメス出版
- 金子光一 (2000)「市民社会の民主制のあり方に関する一考察 ―ギルド社会主義とフェビアン社会主義―」『淑徳大学社会学部研究紀要』第34号
- 金子光一 (2002)「社会福祉の歴史」新・保育士養成講座編集委員会編『社会福祉』全国社会福祉協議会
- 菊川忠夫 (1966)『人と思想 J. S. ミル』清水書院
- 関嘉彦 (1979)「ベンサムとミルの社会思想」『世界の名著49 ベンサム J. S. ミル』中央公論社
- 名古忠行 (1987)『フェビアン協会の研究』法律文化社
- 安川悦子 (1993)『イギリス労働運動と社会主義―「社会主義の復活」とその時代の思想史的研究』御茶の水書房

A Study of the Welfare Ideas of John Stuart Mill: His Influences on the Fabian Society

Koichi KANEKO

This Study attempts to clarify the ideas of John Stuart Mill on welfare and to evaluate the impact of these ideas on Fabian Socialism.

In the first chapter, I considered Mill's opinion on poverty differentials by referring to his *Principals of Political Economy*. Mill agreed with socialism and warned that there were some contradictions in the social conditions of the day. In the last chapter of *Principals of Political Economy*, Mill wrote:

'In this or some such mode, the existing accumulations of capital might honestly, and by a kind of spontaneous process, become in the end the joint property of all who participate in their productive employment: a transformation which, thus effected, (and assuming of course that both sexes participate equally in the rights and in the government of the association,) would be the nearest approach to social justice, and the most beneficial ordering of industrial affairs for the universal good, which it is possible at present to foresee.' (Mill 1848:792)

I then moved on to some of the socialist ideals which influenced Mill, starting with the opinions of Louis Blanc and François Marie Charles Fourier in France, and moving on to the effect on Mill of Harriet Taylor, a woman whom Mill met when he was 24 years old and loved for over twenty years.

In the second chapter, I considered some of the influences on Fabian Socialism in its early days by investigating the relationship between Mill and the Fabian Society. In his *Autobiography*, Mill said that

'The social problem of the future we considered to be, how to unite the greatest individual Liberty of action, with a common ownership in the raw material of the globe, and an equal participation of all in the benefits of combined labour.' (Mill 1873:175)

I think this view is the central idea of English Socialism.

After that, I looked at three initial members of the Fabian Society, Sidney Webb,

Beatrice Webb and George Douglas Cole to determine to what extent their thoughts were influenced by Mill's ideas. I concluded by looking at their respective fields of interest that there was indeed evidence that all three were influenced by Mill and took his ideas into account when formulating their own principles.